18 越ヶ谷宿～粕壁宿

埼玉県越谷市　埼玉県春日部市

千間台 ～ 武 里

（ 歩行距離 1782m 23分 ）

歩く地図でたどる日光街道

http://nikko-kaido.jp/

JZE00512@nifty.ne.jp

④香取神社

7月15日の「やったり踊り」は江戸時代の助郷制度に反発し、助郷の人馬徴発は土地の広さに比例して課せられたので、不毛の土地は収穫がないのに租税が重かったので、他の村に押しつけるのだが大畑と隣の備後の間まで江戸川と中川に挟まれた土地は低湿地で洪水が多い不毛の土地があった。その所有を相撲でつけることになった。その結果、大畑村が勝ったので「やったり、やったり」と踊り回ったのが始まりだという。

②大枝香取神社

本来は、隣接している歓喜院の寺鎮守として祀られいたが明治初年の神仏分離政策により、歓喜院から独立した。明治42年合祀政策をうけて字池端の村社浅間神社を合併し、字屋敷前の第六天神社と雷電神社を合祀して大枝村の村社となった

③歓喜院の几号

日光街道沿いに一列に並んでいたが、昭和29年頃の道路拡張にともない現在の手桶舎の右側に移された。宝篋印塔の台石の裏側に明治の水準点である几号「高低測量几号」が刻まれている。

coffee time

枡形

宿場の両端の街道を直角に曲げた場所。外的を迎え撃つための城郭の虎口（こぐち）、あるいは曲輪の正面開口にあたり木戸などの門を設けた。

coffee time

立場

五街道やその脇街道などで次の宿場が遠い場合や、峠などのような難所がある場合に、休憩施設として茶屋や売店が設けられました。俗にいう「峠の茶屋」などがこれにあたります。馬や籠の交代を行うこともあった。

藩が設置したものや、周辺住民の手で自然発生したものもある。また、立場として特に繁盛したような地域では、宿場と混同して認識されている場合もある。この立場がへ発展し、大きな集落を形成し、宿屋なども設けられたのは間の宿（あいのしゅく）という。間の宿には五海道設置以前からの集落もある。中には小さな宿場よりも大きな立場や間の宿も存在したが、江戸幕府が宿場町保護のため、厳しい制限を設けていた。

coffee time

問屋場

宿場で人馬の継立、助郷賦課などの業務を行うところで、駅亭、伝馬所、馬蹄ともいった。

業務の主宰者は問屋と称され、その助役の年寄り、さらに人馬の出入りや賃銭などを記入する帳付、人馬に荷物を振り分ける馬差などの者がいた。通常のときは交替で出勤するが、大名行列などの大通行があるときは全員が詰めることになっていた。

①東武鉄道せんげん台駅

「せんげん」は、駅の北を流れる川（排水幹線）は元禄12年（1699）に逆川（現在の葛西用水路）を堀広げて造った「千間堀」（現在の新方川）にちなんでおり、「台」は、地名学的には川沿い、海沿いの平らな高地のことをいい、駅名としました。昨今は、「台」は団地の所在から、「武里団地」の存在を表してもいます

coffee time

将軍社参

徳川将軍の「家」と日光社参

日光社参は、徳川将軍が下野国日光山に行き、初代将軍家康を東照大権現として祀る東照宮、および三代将軍家光を祀る大猷院という「家」の先祖の霊廟に詣でる行事である。広義には将軍家の世嗣、隠居した大御所の参詣も含めていう。日光社参は実に17回を数え、ほかに予告されたものの無期限延期とされたときもあった。

日光社参の際には、大老・老中をはじめとする主要な伐角はもちろん、大名や旗本・御家人など総勢十数万人ともいわれる武家が将軍に供奉する巨大な行列がくれ、江戸と日光山を往復した。その比類のない規模は、行列の先頭が日光に着いても最後尾が江戸にいる、という俗説も生む。しかも関係する輸送に必要な人馬の準備、各地での警備、犯罪者に対する恩赦の実施など、まさに全国を巻き込む国家的行事であった。

道中出立

将軍社参は膨大な規模であるため、出立当日は深夜から行列が始まるのが慣例である。天保14年（1843）の社参での出発の様子を具体的にみていきたい。『慎徳院殿御実記』によれば、将軍の首途式は4月13日となっているが、先頭を勤める奏者番兼寺社奉行松平乗全が江戸城を立ったのは前日12日の亥の刻（午後2時）のことである。続いて祭礼奉行青山幸哉が子の刻（午前0時）、奏者真田幸良が丑の刻（午前2時）、老中堀田正篤（後に正睦）が寅の刻（午前4時）、若年寄遠藤胤統が卯の刻（午前6時）であり、同時刻に将軍の供揃えの先頭である御幕長持隊が出発している。将軍が江戸を立つのは辰の刻（午前8時）頃であり、この時点で先頭が出発してから10時間が経過しており、最後尾を勤める松平勝善が出発するのは、さらに2時間後の巳の刻（午前10時）頃である。先頭は夜道を歩き、日が昇る午前6時頃にはすでに岩槻に着いていることになる。このように行列は10時間以上にわたって続いており、道中筋の村々では行列が過ぎるまで、対応に追われることとなった。

道中行列

ちなみに百人組組頭で知行高五千石の旗本花房正理の行列をみると組頭である花房を筆頭に与力25騎・徒同心組頭4人・徒同心98人をはじめとして、足軽・中間・人足・ 馬の口取りなどの小者に至るまで、総勢648人、馬73匹におよんだ。

道中の休息・昼食

江戸を出発した社参の行列は休憩・昼食を挟みながら歩みを進めていく。最初の休憩所は安永の社参までは王子の金輪寺であったが、天保の社参では飛鳥山で最初の小休止をとっている。昼食は錫杖寺で取り、続いて小淵（鳩ヶ谷市）のあたりで幕を張り2回目の小休止をとっている。その後も途中で籠を止めたり、休憩をしている。

岩槻城到着

申の刻（午後4時）頃には岩槻城へ到着している。岩槻城下に入ると大名を始め供の者たちは、あらかじめ決められたルートに従って散会し、事前に予定してある宿所に行き休息を取るのである。

このため、岩槻・古河・宇都宮を始め、近隣の村々でも屋敷の間取り調査が行われ、社参中は供の宿所にあてられている。

また、大名などは事前に領地の村の名主などに宿泊先の宿所や賄いなどの契約をさせ、泊まる場所の確保をするなどしていた。

将軍は岩槻城に入城し、城主との拝謁をはじめ、献上物や拝領物の交換を行い、一献を傾けて一日が終了する。以後江戸へ環御するまで道中では同様の行程が続くのである。